

◇ 巻頭言 ◇



## 分析化学のさらなる発展を

寺前 紀夫

新年あけましておめでとうございます。今年は十二支の八番目にあたる<sup>ひつじ</sup>未年です。平和で安寧な一年であり、会員の皆様にとってより良き一年となりますよう、祈念致します。

さて、この場をお借りして会員の皆様に本会の新たな活動の一部を紹介させていただきます。日本分析化学会の主要行事に、年会と討論会があり、多くの会員の皆様が研究発表を行い、課題等を討論し、また会員相互の交流が行われております。毎年各支部が交代で担当し、今年の討論会は甲府で、年会は福岡で開催予定です。今まで、その企画と運営など、すべてを担当支部にお願いしてまいりましたが、昨年中国四国支部担当の広島年会から、本部企画として「アジア国際シンポジウム」(ASAS: Asian Symposium on Analytical Sciences)と「産業界における研究開発と分析ソリューション」シンポジウム(産業界シンポジウム)とをプログラムに取り入れました。ASASでは海外の著名研究者と本会の中堅研究者とを招待講演者として国際交流を図り、産業界シンポジウムでは企業研究者による招待講演を行うとともに企業会員の交流・連携を図りました。これらのシンポジウムは今後も継続する予定です。もう一つの取り組みは、理事会や本部支部連絡会等の協議で、本部で企画と運営を行う年会と討論会を、七支部による順次開催の途中に入れることにしたことです。本部というより、全支部合同と言ったほうがよいかもしれません。8年に一度、オールジャパン企画の年会または討論会が開催されることとなります。年会については、九州支部、北海道支部の後に本部担当が入り、その後は従来どおり、東北支部、関東支部という開催順になります。第1回目本部担当年会は東京を開催地として予定しています。オールジャパンの企画で新しい潮流が生まれることを期待いたします。

ところで、分析化学のルーツとして19世紀から20世紀初頭にかけての、Berzeliusの化学量論、BunsenとKirchhoffの分光法、Heyrovskyのポーラログラフイー、Tswettのクロマトグラフイーなどがよく言及されます。これらが20世紀初頭からの我が国の分析化学の発展の礎となり、それらの方法論は分析化学のみならず他の学問分野の礎ともなっています。分析化学の特徴は分析対象として実試料を念頭に置いていることにあると考えます。鉱物中の元素分析、海水分析、鉄鋼分析、高分子分析、環境分析、生体試料分析等々、時代とともに分析対象は<sup>ひろ</sup>拡がりました。実試料中の目的成分を分析するための前処理法、系統的分析法、高選択的分析法、高感度分析法など多くの手法が開発されて、分析化学が現在の人類の社会活動を支えていると言っても過言ではないと言えます。社会の発展と共に要求される分析はますます多様化することになりますが、会員の皆様のお力で分析化学が社会へさらなる貢献を果たせるよう期待するところです。

[Norio TERAMAE, 公益社団法人日本分析化学会会長]